

朋有会

同門会誌創刊号

令和元年七月

巻頭言

朋有会会長・宇治徳洲会病院小児科 重松陽介

2019年（令和元年）は朋有会にとっても大きな節目の年です。

眞弓光文先生が福井大学学長の激務の任期を全うされ、次期学長にその職務を手渡されました。引き続き福井の地にとどまり、ぼけ防止に福井大学の今後を横目に、ゴルフと鮎釣りの年金生活をされるようですので、福井の朋有会会員の皆様もお付き合いをお願いいたします。

谷澤昭彦先生ががん専門医育成推進講座教授を退任され、杉田玄白記念公立小浜病院長に就任されました。大学小児科血液・腫瘍部門の若手陣の成長に満足されながら嶺南の地域医療に注力されることでしょう。

畑郁江先生は大学准教授として臨床・研究に多忙を極めておられましたが、福井県立病院小児科を発展させるべく“主任医長”に転出されました。大学小児科代謝・内分泌部門の若手は畑先生の指導が必要な成長途上にあり、当分畑先生のご多忙はしばらく解消されないでしょう。

安富素子先生が米国マウントサイナイ医科大学留学から帰ってこられました。大学小児科の免疫・アレルギー・感染部門の中堅としてますますのご活躍が期待されます。福井大学小児科ホームページのスタッフ紹介のページで医学部卒業年度を見るとわかりますが、安富先生以降は2000年より後の世代ということですが、その若手達もこの1年国際学会発表などの活躍をされており、頼もしい限りです。

須藤正克先生は米寿の域を越えられました。福井大学（当時福井医科大学）小児科初代教授に着任され、その後福井医科大学学長として医科大学再編の荒波を乗り越えられながら、ずっと福井大学小児科のことを気にかけていただいており、名誉会員として朋有会に参加していただいているのは誠にありがたいことです。

重松陽介客員教授は「福井大学医学部付属病院・小児科代謝検査部門」を立ち上げ、引き続き新生児マススクリーニングの精密検査事業を担っています。分析機器の老朽化が悩みの種ですが、大嶋勇成教授のご支援をいただいて更なる展開を模索しています。常勤医師としては宇治徳洲会病院で小児科専門医養成のお手伝いをさせていただいております。内分泌・代謝外来も結構繁盛していますが、福井大学病院での川谷先生のような専門家と連携できないのが悩みです。

ということで本務地が県外になっておりますので、重松が朋有会会長を仰せつかっておりますが、地元密着の斉藤正一先生に会長職をお願いすることにしました。斉藤先生、よろしくお願い致します。

以上、会報巻頭言とさせていただきます。

朋有会の皆さんへ ー近況のご報告ー

眞弓 光文

まず、福井大学医学部小児科学教室が大嶋勇成教授の下でますます活発に活動していることを、朋有会の皆さんと共に祝いたしたいと思います。

私はこの3月末に学長職を退職し、ちょうど70歳になったこともあり、年金生活に入りました。23年前に福井医科大学（当時）の小児科教授として着任以来、朋有会の皆さんに支えて頂き、大嶋教授という素晴らしい後任に恵まれ、また、前任の須藤先生から事ある毎に適切なご助言、ご指導を賜ったおかげで、なんと小児科教授、医学部長、理事・副学長、学長と続いた職責を果たすことができました。この場をお借りして、あらためて朋有会の皆様に感謝いたします。本当に有り難うございました。

4月以降は仕事を離れています。退職にあたり、「なにも仕事をしないとすぐに退屈になって、何かしたいと思うに決まっていますよ」という意見を多く頂きましたが、もともと勉強はあまり好きでなく遊ぶことが大好きな私は、現在の気ままな生活にすっかり満足しており、今のところ働きたいという気持ちはおきてきていません。毎日が休みなので、好きなゴルフや鮎釣りにいつでも行けるはずなのですが、うまくしたもので暇はあっても体力と気力が欠けており、そうはいきません。特に鮎釣りの方は、石の多い河原でちょっとバランスを崩しただけで、体重を支えることができずに何度もこける始末。「よろよろ」という表現がぴったりかもしれません。もし自分でその時の自分の様子を見ることができれば、我ながら「これはまずいぞ」と思うと思います。それでも、月に数回のゴルフを楽しみ、鮎釣りにも4回行きました。今年の鮎釣りシーズンは残りあと1ヶ月。なんとか以前のように秋の教室バーベキューに釣った鮎を出せるよう頑張りたいと思いますが、今年もこの数年同様全く釣れませんので、あまり期待しないでください。鮎釣りに一回行くと、その後数日は家でごろごろして足腰の痛みの回復を待っている有様ですが、今のところ元気にはしておりますので、どうかこれからも変わらぬご厚誼をお願いします。

振り返ってみれば、福井医科大学、福井大学医学部と続いてきた私たちの小児科学教室も、私が着任した時の助手（当時）以上のスタッフは大嶋教授を除き誰も教室にいませんでした。当時は卒業後間もなかった若い人達がいまや中堅として教室を引っ張ってくれていることに、あらためて時の流れを感じます。私の後任の教授として大嶋先生が着任してくれたのも、本当にうれしかった出来事で、私は心おきなく大学の管理職を努めることができたのですが、早いもので大嶋教授着任後10年になります。この間、大嶋教授の下で若い人達が力を合わせて大変頑張って、福井大学小児科の医療レベルを高め、また、後輩を育ててくれていることに感謝しています。

しかし、これからの福井の小児医療を取り巻く環境は、少子化の影響を受けて、これまで以上に厳しいものになると考えます。福井県小児科医会会報にも書きましたが、優れた一般小児医療と専門小児医療の両方を福井という人口規模の小さい地域に残していくことは容易なことではありませんが、福井の小児医療の中核を担う朋有会の皆さんが大嶋教授の下に団結して福井の小児医療をさらに発展させていってくれることを願っています。

福井大学医学系部門医学領域小児科学教室

神経グループの歩み

1983 年 10 月の福井医科大学附属病院開院と共に小児神経グループの活動が始まりました。小西行郎先生が勤務されていた福井赤十字病院や福井県立小児療育センター（現福井県こども療育センター）での神経専門外来も同時に開始されています。神経疾患の最初の入院症例は、レノックス・ガストー症候群でした。翌年には、栗山政憲先生が赴任され、小西薫先生と共に 3 人で小児神経外来を行いながら、金津保健所をはじめ、今庄、三方保健所など福井県下での乳児健診業務も始まり、当科と福井県内の保健所、保健センターとの連携活動が現在まで続いています。

研究面では、高ビリルビン血症ネズミにおける ABR の変化、小児神経疾患における DSA による脳血管撮影や SPECT の変化、点頭てんかんに対する少量 ACTH 療法の試みなどの基礎的、臨床的研究が行われました。また、当時当院に導入されたばかりの MRI を用いて小児神経疾患への応用について藤井先生を中心に精力的に研究が行われておりいます。特に、新生児の脳室周囲白質軟化症における MRI 所見や中枢神経系の正中構造の成長曲線の作成は、本邦で先駆けての報告となっています。さらに、当学の高エネルギー研究所と共同で機能的 MRI を用いた新生児の研究なども行われています。新生児の自発的な全身運動の観察と神経学的予後との関連についての General movements (GM) 研究は、文部省科研費重点領域研究に採択され、日本乳児行動発達研究会（後に日本赤ちゃん学会に発展）への設立に繋がるとともに、その研究成果は、日本小児神経学会の優秀論文賞を受賞しています。

その後、小西行郎先生、小西薫先生は埼玉医科大学へと異動され、栗山政憲先生は開業され、藤井靖史先生は帝京大学に異動されました。その後、中井昭夫先生、木村宏輝先生、木村恵子先生や川満徹先生が中心となり、新たな小児神経グループへと引き継がれました。中井先生が中心となり、新生児の難聴に関する機能的 MRI を用いた神経機能画像研究や発達性協調運動障害の診断や評価に関する国際共同研究などが進められました。また、川谷正男と米谷博は、国立精神神経センター武蔵病院（現国立精神・神経医療研究センター病院）小児神経科に国内留学し、修了後は、福井県内の小児神経分野における臨床、研究、教育面での発展を担ってきました。特に平谷こども発達クリニック平谷美智夫先生の御指導の下、クリニックの膨大な臨床データを用いた発達障害の臨床研究を現在まで継続的に行っています。現在は、川谷を中心に、巨田元礼、小坂拓也が小児神経グループに加わり、研究面では、科学研究費の基盤 C や若手研究を獲得して、小児の発達障害の病態解明や診断に有用なバイオマーカーの開発、学習障害の早期診断と介入方法の試み、発達障害とその家族（特にきょうだい）に対する有効な支援方法の開発、小児同胞例やキレる子どもを対象とし非線形解析を用いた脳内神経ネットワーク障害の解明、自閉スペクトラム症児における睡眠研究等を行っています。臨床面では、福井県で唯一の日本小児神経学会小児神経専門医認定施設として、希少疾患や難治性疾患の診断や治療を行っています。また、福井県内の小児神経専門医を志す若手医師育成や専門的な指導を行うために、小児神経に関する画像、脳波・てんかん、心理・発達障害や臨床遺伝の勉強会を定期的に開催しています。さらに、公立小浜病院、市立敦賀病院や福井県こども療育センターで小児神経・精神疾患の専門外来を開設し、

福井県内の小児神経の専門的診療ネットワークを構築しています。特に発達障害などの小児精神疾患に関しては、附属病院こどもの心診療部、平谷こども発達クリニック、福井県こども療育センター等と連携を取りながら、発達障がいの診断、治療や専門医の育成に力を注いでいます。

2019 年 7 月（文責 川谷正男）

新入会員自己紹介

福井大学医学部附属病院小児科後期研修医 新田祥代

はじめまして、この春に入局いたしました新田祥代と申します。愛知県出身で大学進学を機に福井へと移り、大学6年の間に福井の魅力に取り込まれ、すっかり地元へ帰る気をなくし福井でひよっこ小児科医としてお世話になることとなりました。

福井の魅力は挙げればキリがありません。お米も魚介類もご飯はなんでも美味しく、お酒も絶品、人柄も穏やかで地元のニュースで犯罪が報じられることも稀、すっかり福井が第2の故郷となっています。福井に残ったのを後悔するのは大雪の朝くらいでしょうか。今やたまに帰省しても、もはや名古屋弁は話せないレベルです。

入局後は日々、自身の無力さを痛感しつつも、指導医をはじめ多くの先生方のご指導のおかげで、子供たちと触れ合える楽しさや彼・彼女たちの成長の一助となれるやりがいを感じています。私自身、患児であったことから11歳のときに小児科医を夢みるにいたり、紆余曲折ありながらも、やっとスタート地点に立てた気持ちです。ここからまた新しい夢が始まると思うと期待と不安でパンクしてしまいそうですが、11歳のころの私が描いた理想の小児科医に少しでも近づけるように精進したいと思います。

まだまだ拙い私ですが、今後とも何卒よろしく願いいたします。お会いする機会がありましたら、ぜひお声かけください。

小児科への道

福井大学医学部附属病院小児科後期研修医 福岡諒

この度、福井大学医学部小児科に入局することとなりました福岡諒と申します。若輩者の私ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

小児科への興味は、幼少期からありました。口唇裂で生まれてきた私は、生まれてすぐに手術をし、その後も小児科へ通う機会が多かったのです。通っているうちに、小児科医への憧れを抱くようになり、気づけば母校の福井大学医学部へ進学、そのまま母校での研修という流れになりました。研修医になった当時は、幼少期の小児科への意欲は薄れておりました。とはいえ何科になりたいという気持ちも特になく研修生活を過ごしていたわけですが、1年目の11月に、息子が誕生します。息子は1796グラムで生まれてきたこともあり、当院NICUで1ヶ月お世話になることとなりました。そこで看護師さんたちから子育てを学びつつ、小児科の先生方と接する機会も増え、次第に小児科に惹かれるようになりました。息子のすくすくとした成長を見守りつつ、2年目の7月、ついに小児科ローテーションが始まります。吉川先生のもと、充実した研修をさせていただく中で、小児科の魅力にどんどん惹かれ、すぐに小児科入局を決めました。

昨年の12月から小児科を再びまわり始め、そのまま入局となりました。この約8か月間、わからないことだらけで上級医に迷惑をかける日々ですが、入局させていただいて本当に良かったと感じております。これからも皆様にご迷惑をお掛けすることが多々あるかとは思いますが、自分なりに精一杯頑張りますのでどうか温かい目で見守っていただき、またご指導いただけると幸いです。

「福井県と出会って」

福井大学医学部附属病院小児科後期研修医 川浪 春菜

はじめまして。2019年4月より福井大学医学部附属病院小児科に入局しました、川浪春菜と申します。私は東京都品川区の出身ですが、紆余曲折あり高校卒後2年の時を経て福井大学へ入学しました。大学6年間は軽音部に所属し、音楽という趣味は福井で知り合いの輪を広げてくれる良い活動になりました。福井での大雪は雪かきも初体験、融雪装置ってなに？？という状態で、東京育ちの私にとって珍しいことばかりで大変以上に楽しい日々になりました。お酒と食べ物が美味しいところも非常に魅力的でした。そんな大学生活を過ごすうち、人との繋がりのできた福井という場所に愛着を感じるようになっていきました。

私は兄弟が多く6人兄弟の1人目です。そのためか昔から子供が好きで、同時に子供が成長していくことの面白さを感じていました。それほど病院にお世話になる子ではなかった私ですが、人と関わる仕事がしたいと感じていた高校生の時から子供と関われる「小児科」に興味を持ち、入学後から今まで小児科志望として過ごしてきました。東京へ帰るか福井に残るかの選択を迫られた時、大学生活を通して愛着を持つことのできた福井に残るのも悪くないな、と思い今に至る次第です。

この4月からはまずNICUへ配属され、3ヶ月間のNICU研修を終えて一般病棟での1か月が終わったところです。自分の至らなさに滅入る日々ですが、知識が増える事、実践できる手技が増える事に今は喜びを感じています。ご指導頂いている先生方、看護師さんへ感謝する毎日です。

7月から当直業務(見習いですが…)も始まり、他科から「小児科」として相談を受けることも増え、また10月からの「1人立ち(主治医になる、当直を上級医の援護射撃なしで行う)」も目前に迫ってきており、より一層身の引き締まる思いです。小児医療に携わる皆さんそして患者さんに信頼頂ける医師になれるよう、より一層努力していく所存です。まだまだ未熟者ですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

大学の近況

スタッフ

教授	大嶋 勇成
講師	川谷 正男
	安富 素子
	鈴木 孝二
助教	巨田 元礼
	奥野 貴士
	川崎亜希子
	五十嵐愛子
	吉川 利英
特命助教	湯浅 光織
	林 泰平

医 員	磯崎 由宇子
	小坂 拓也
	山田 健太
	伊藤 尚弘
	杉原 啓一
	清水 達人
	有賀 譲
専攻医	川浪 春菜
	新田 祥代
	福岡 諒

非常勤医師	重松 陽介	(客員教授・宇治徳洲会病院小児科顧問)
	谷澤 昭彦	(客員教授・杉田玄白記念公立小浜病院院長)
	齋藤 正一	
	畑 郁江	(福井県立病院小児科医主任医長)
	田村 知史	(市立敦賀病院小児科部長)
	森 夕起子	(勝山総合病院小児科部長)
	玉村 宗一	(福井赤十字病院小児科)
	村井 宏生	(くじらキッズクリニック院長)

事務補佐員	岸本 元世
	小島 由美
技術補佐員	豊岡 美千代
	森 由紀
	米野 聖子

関連病院 近況報告

福井循環器病院小児科、福井愛育病院小児科 グループ

福井循環器病院小児科 西田公一

福井大学小児科同門会「朋有会」の皆様におかれましては日々ご健勝のこととお喜び申し上げます。私、福井循環器病院小児科、西田公一です。旧福井医科大学第9期卒業生であり平成6年に小児科入局しております。本稿では私の勤務する福井循環器病院とそのパートナー施設である福井愛育病院についてご紹介するとともに我々が担っている小児循環器診療の日常の一部をお伝えできればと思います。

《沿革》

・福井循環器病院

地元福井の皆様「心臓センター」の愛称で親しまれている医療法人心臓血圧センター福井循環器病院は昭和42年に創設されています。日本で最初に先天性心疾患手術（動脈管開存賞手術）を執刀された榊原仟先生が開設に関わられました。そのような歴史的経緯から当院は小児心臓手術を病院の柱として重視しており我々小児科の外来は「第一診察室」を割り当ていただいています。当院が福井県の心臓診療の嚆矢であることが病院スタッフの士気の拠り所となっています。

・福井愛育病院

昭和47年に福井循環器病院にそれまでなかった周産期部門を担う施設として誕生したのが福井愛育病院です。当初は福井循環器病院の立地内からのスタートでしたがその後拡充と移転を繰り返し平成15年より現在の立地となっています。県内トップの産科分娩数もさることながら特に小児科領域では心疾患新生児の診療を得意とする診療科としての地位を確立しています。

《小児循環器診療について》

福井循環器病院小児科と福井愛育病院小児科は長年それぞれに特色を補完し合いつつ一つの診療圏を形成しています。

胎児エコーによる心疾患早期診断、出生後のNICU管理を担う福井愛育病院、そして心疾患の手術とカテーテル診断・治療、周術期から術後遠隔期にわたる管理を行う福井循環器病院、といったふうな住み分けです。平成20年より日本小児循環器学会修練施設群として認定されており、この2施設での研修は小児循環器専門医の修練期間として算入いただくことができます。

小児心臓手術は毎週月曜日に行っています。例年40-50例程度の件数がありましたがここ数年は心疾患出生数が減り30例程度に減っています。心臓カテーテル検査は愛育病院・循環器病院を合わせて年間およそ60-70例といったペースです。うち10数例が治療目的のインターベンションカテーテルとなります。カテーテル治療はバルーンカテーテルによる弁形成・

血管拡張術、塞栓コイルによる体肺短絡血管の塞栓術が主です。時に緊急で行うバルーン心房中隔裂開術などもあります。

	福井愛育病院	福井循環器病院
NICU	あり	なし
カテ室	なし	あり
心臓手術室	なし	あり
診療体制	当直制	オンコール
診療内容	一般診療から各専門範囲に至るまで。	小児循環器診療が中心。

小児循環器に興味がある、もしくは小児循環器を専門にしたいと考えておられる先生方へ。循環器を集中的に勉強したいという方には国立循環器病センターやこども病院の循環器科などのレジデント研修を積むという方法しかこれまでありませんでしたが、なんとか地元福井にいながらも本格的な循環器の勉強ができる施設を目指しています。全国に通用する小児循環器医を福井で育成したいという夢を我々は持っています。是非、当院を除きに来てください。カテーテルだけの見学なども歓迎いたします。お気軽に連絡してください。



福井総合クリニック小児科 山田直江

いつも皆様には大変お世話になりましてありがとうございます。

私が福井総合クリニック小児科に配属になったのは、現在大学1年生になった長女がちょうど小学1年生になった平成19年4月からで、今から12年前のことです。その頃は入院部門（江上にある福井総合病院）と外来部門（新田塚にある福井総合クリニック）の場所が近々離れることや、小児科の入院がなくなる、産婦人科がお産を扱わなくなる、など病院としても色々と変化のあった時期で、自分自身もほぼ一人での外来診療や福井医療短期大学の講義の担当など、勤務状況の変化になかなかついて行くのが大変だった時期でした。

10年ほど前からは、以前笠原医院に勤務されていた老木知子先生と一緒に外来中心の診療を行っております。普段は一般外来診療や、乳児健診、ワクチン業務、学校医をさせて頂いている新田塚こども園（元新田塚保育園）の年2回の健診、福井総合病院に来られている研修医の先生の御指導などを行っています。

土曜日午前も一般診療をしており、土曜日隔週で以前来て下さっていた福井大学小児科の村井宏生先生や、今年の4月から新しくお世話になっている安富素子先生、川崎亜希子先生にもアレルギー関連の診療もして頂いており、患者さんからの評判も非常に良いです。

当科だけの特色ではないと思いますが、同じクリニック内に耳鼻科や放射線科、眼科、婦人科、皮膚科、泌尿器科、神経内科、整形外科、各種内科、歯科などの先生も常勤でいらっしゃるの、小児科的に診断に迷うような時には気軽にご相談出来る事がありがたいと思っています。当科は入院患者さんを診られないため、いつも快く入院を引き受けて下さる色々な病院の先生方にもこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

病後児保育も行っており、一般の方はもちろん、私も含めて当施設の職員さんもお世話になっています。ただ、診察した後に診断がついて当日お預かりできなくなる疾患も結構あるため申し訳ない時もあります。病児保育が可能な他の施設の先生方にもお手数をお掛けしてすみません。

当院は医師以外の職員さんも気さくな方が多く、年に1回の職員旅行も親睦を深めるのに良い機会となっています。



今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

福井県立病院 小児科

畑 郁江

福井県立病院は、福井市の中心部に一般 660 床、精神 198 床を有し、福井大学とともに福井県の医療の中心的役割を担っている病院です。小児科スタッフは、現在常勤医 7 名（うち 1 名は母子医療センター長兼務）、専攻医 2 名が在籍し、日々忙しい業務をこなしています。



当科では、県内の小児医療において、以下の 3 つの役割を担っています。

●1 次から 3 次救急まで対応する小児科一般診療

当院は救命救急センターを擁し、日中～夜間に関わらず、多くの外来・入院患者を受け入れています。年間約 1000 名の患者さんが入院され、多くは数日間で退院していきませんが、3 次救急として他院からの転院搬送もあるため、ICU 入室を要する患者さんも少なくありません。慢性疾患にも対応しており、大学病院に集約している腫瘍性疾患についても、陽子線治療を当院で行う患者さんが年 1～2 名はあります。

●小児外科疾患にも対応可能な新生児医療

総合周産期母子医療センターでは、NICU 9 床、GCU 6 床で年間約 150 名の新生児を受け入れています。最近是在胎 25 週以下の超低出生体重児の入院は少なくなっていますが、県内で唯一の小児外科疾患に対応する NICU としての役割を担っているため、長期入院を要する重症児も常に入院している状況です。

●こども療育センターと連携した障害児医療

福井県こども療育センターが隣接しているため、医療的対応が必要な障害児の診療を多く担当しています。近年、在宅人工呼吸管理や胃瘻栄養を行っている児が増加しており、常に 1～2 名以上の児が入院治療を受けています。主に重症児を対象としたレスパイト入院も受け入れています。



当院は、大学病院と比べて、より県民や各医療機関と密接に結びついた病院であり、実に様々な疾患、相談などに対応が必要な、第一線の病院です。限られたスタッフ数ではありますが、忙しい中でも情報を共有し、それぞれの専門性を生かしながら知恵を出し合い、よりよい医療の提供を目指しています。個性豊かなスタッフすべてが、いかに実力を発揮できるチーム作りが大切と考えています。

また、当科では、福井大学、金沢大学および当院（自治医科大学出身者が多い）の小児科専門研修プログラムで研修する専攻医が、2〜3名一緒に勤務しています。専攻医たちは、ペアを組んだ指導医と共に様々な患者さんの診療に当たっていますが、緊張感の続く毎日でしょう。しかし、他大学出身の同期と助け合い、競い合いながら、目の前の問題について自分自身で考えて、解決する努力を重ねていくうちに（怒られてもめげずに・・・）、大きな実力と自信につながっていくことと思います。スタッフ全員で有意義な研修なるように支えていきたいと思っています。



朝のカンファに集合（初期研修医と）



母子医療センター長

女子です

「福井赤十字病院の特色と現況」

小児科 渡辺康宏

福井赤十字病院は、明治初期に福井藩医学校（明道館）が明新館と改称し、その後福井公立医学所、福井病院、県立福井病院と変遷し、大正 14 年に現在の地、足羽川の南に日本赤十字社福井支部病院として開院しました。そして昭和 18 年に福井赤十字病院と改称し、今年で開院 94 年ととても古い歴史をもっています。

小児科病床は成人との混合病棟に 9 床、ベビーセンターに 10 床、合わせて 19 床あります。RSV 感染症の流行時などは定数の病床数以上の入院患者がおり、一旦減っていた入院数は昨年頃から増加傾向となっています。

福井東特別支援学校月見教室が院内に併設されており、長期入院だけでなく 2 週間程度の入院の場合も学業が遅れないように勉強できる体制がとれています。

外来は午前が一般外来、午後が専門外来を行っています。

現在常勤の小児科医は 5 名で、主に渡辺が神経、玉村が腎、野村がアレルギー疾患を担当しています。後期臨床研修医の宮永、清水は小児科全般の疾患を担当できるように研鑽を積んでいます。

アレルギー、心、内分泌・代謝疾患につきましては、大学病院や開業医の先生に応援を頂き専門性の高い外来診療を行っています。

特に腎疾患の診療は充実しており、非常勤の森医師にも応援して頂きながら、年間 10-15 件程度腎生検を行っており、また腹膜・血液透析患者、腎移植後の患者への対応も行っています。水腎症、膀胱尿管逆流症など先天奇形も、泌尿器科と連携し対応しています。

最近では、慢性の頭痛、腹痛や不定愁訴を訴える児の受診も増えており、心理的なサポートや薬物療法を行っていますが、必要な場合は当院の臨床心理士によるカウンセリングを行っています。

また、虐待予防にも力を入れており、産科医、助産師と連携を密にとり、精神疾患を持っていたり、未婚や 10 代、また複雑な家庭環境をもつ母の出産の際は、小児科医も関わるようにしています。新生児期以降も地域の保健師さんなどと連携をとりながら、なるべくフォローを続けるようにしています。

時間外の診療は、月、木の小児二次輪番担当日は当直し、それ以外はオンコール体制をとっています。ご紹介頂ける場合は、輪番日以外も小児科医で対応させていただきますので、随時ご紹介頂ければ幸いです。

その他、小規模ながら病児保育を行ったり、他科の小児入院例を併診したりと病院の要望にも応えながら、院内における小児科医の存在価値を高めることにも注力しています。

昨年度の小児科の入院数、外来数は共に一昨年度を上回ることができ、今年度も 3 ヶ月が経ったところですが、さらに昨年度の同時期を上回っています。これも、連携医の先生方が患者さんをご紹介して下さるおかげと、とても感謝している次第です。今後も信頼してご紹介頂けるように丁寧な診療を心がけていきたいと考えています。

現在、後期臨床研修医が 2 名在籍していますが、common disease をしっかり診れるように、入院から外来と継続してフォローできるようになって欲しいと思っています。現在の臨床研修制度の中でも、当院が少しでもお役に立てるようにしていきたいと考えています。



市立敦賀病院小児科

安藤 徹

市立敦賀病院は、明治 15 年に県立敦賀病院として開設以来、二州地区の中核病院としての役割をにない。現在、敦賀市、美浜町、旧三方町など人口 8 万余りを医療圏としています。病床数は 330 床あまり。年間入院患者数が 5500 人余り、外来患者数 17 万人を数えています。

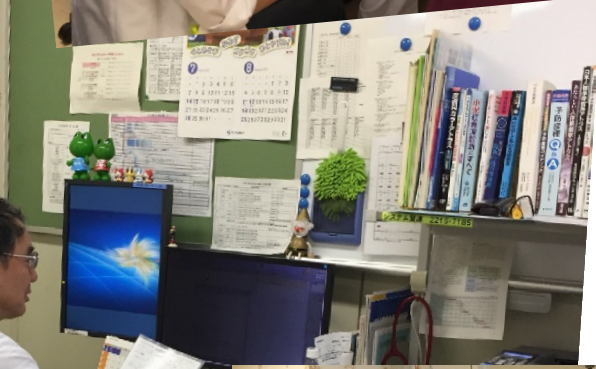
小児科は、現在 4 人の医師が働き、外来は、午前が一般外来、午後が予約外来（慢性疾患）、乳児健診、予防接種を行っています。専門外来としては、田村先生が心臓外来で先天性心疾患、川崎病などの診療、月 1 回ですが大学から川谷先生を招いて、神経外来を開いています。また萩原先生はアレルギー専門医を取得し、経口負荷試験など積極的に行っています。その他、敦賀市や若狭町の乳児検診への出張、学校・保育園など健診もあり、小忙しい毎日です。夜間救急は、敦賀医療センターと協力し、現在は、23 時まで小児科医師の診療を受けれる体制を維持しています。分娩数は、およそ年間 350 程度。適切な母体搬送もあり、超低出生体重児を扱うことはほぼありませんが、それでも仮死や予期せぬ重症児の出生はあり、初期診療を担わねばなりません。

十数年前と比べ、予防接種の充実など影響で、外来患者は感染症から、慢性疾患・発達障害などの診療・相談が多くなりましたが、初診時の一般外来ではそれらが、感染症などの急性疾患と混ざり合って受診している状況です。公立病院として、従来からの急性期医療の需要に対しても応えなければいけませんが、新たなニーズにも対応しなければいけません。

研修医の先生や若い先生にとっては、外来初診や、乳児健診や学校健診、予防接種など地域医療に実際携わり、大学病院とはまた違った医療を学ぶ機会も多いと思います。

スタッフも 1 年づつ年をとってきて、高齢化しています。新鮮な考えを持った、若い人を待ってます。





国立病院機構敦賀医療センター小児科

小児科部長 竹内元浩

当院小児科は美方町にあった国立療養所福井病院が平成 15 年に敦賀に移転してきたもので、敦賀の地で活動を始めてから、まだ 15 年余りです。平成 27 年には、国立病院機構福井病院から敦賀医療センターに名称変更されました。当科は一般小児科医療と同時に、重症心身障害（重心）に対する医療を行っていることが最大の特徴です。重心病棟は 120 床で、基礎疾患として最も多いのは脳性麻痺ですが、ふだん見ることのない稀な先天性疾患の患者さんもありおられます。入所者の出身地は、福井県が 6 割、県外が 4 割です。県内からは福井大学や県立病院からの御紹介が多く、この場を借りてお礼を申し上げます。患者さんの年齢は 0 歳から最年長は 72 歳（!）で、平均年齢は今や 40 代に達しています。医療的ケアとしては、経管栄養 49 名、気管切開 21 名、人工換気 14 名です。私が 15 年前に赴任した時の人工呼吸器はゼロだったので、年に 1 台ペースで増えている計算になります。敗血症やイレウス、肺化膿症・ARDS（急性呼吸窮迫症候群）も珍しくなく、年に数人の患者さんが亡くなられます。脳の機能障害が、神経系のみならず、呼吸、消化器、腎泌尿器、筋・骨など全身に与える影響の大きさは驚くばかりで、予想外の合併症に右往左往することもしばしばです。神経因性膀胱や尿路結石、骨粗鬆症などへの対応も必要となります。医師、看護師だけでなく、PT（理学療法）、ST（摂食嚥下）、OT（作業療法）、ME（臨床工学士）、児童指導員、保育士、特別支援学校教員など多くの職種が専門的な能力を発揮して成立する分野であり、そのトータルコーディネート的重要性を実感しております。近年はショートステイの増加が顕著で、特に週末は定員オーバーとなり、嬉しい悲鳴を上げております。昔は長生きできないと言われていた子たちが医療の進歩で中年となり、今後さらに高齢化が進むと、誰も経験した事のない状況になりそうですが、戦々恐々としながらも急激な変化に対応していけるよう、幅広い勉強をしていこうと思う毎日です。





竹内元浩



平城徹



平城直子



杉田玄白記念公立小浜病院小児科 原 慶和

小浜病院についてご紹介申し上げます。小児科医定数 3 名ですが、令和元年度より谷沢昭彦院長をトップに迎え、非常に充実した体制となりました。



小浜病院の正式名は『杉田玄白記念公立小浜病院』といいます。解体新書で有名な杉田玄白が、小浜藩の藩医だったことから、そのネームバリューをお借りした訳です。確かに学会などで名前を出すと、話の種にもなるので、良い名前だと思っています。ちなみに、駐車場の片隅にある『中川淳庵薬草園』はあまり知られていません。

当院立地の大きな特徴は大学や嶺北の主要病院から遠く離れていることです。これはデメリットでもあります。地域医療を研鑽する上では、欠かせない条件かもしれません。

患者様のご紹介、搬送のタイミングについてはそういった土地柄なので、よく吟味してから本当に必要な症例を絞っております。人の移動の少ない地域で、主要病院は敦賀市の2つの病院と、私どもの病院だけなので、幅広いジャンルでジェネラルな対応を要求されています。専門的な分野はコンサルトを行いながら治療方針を決定しています。



特に力を入れているのは、神経発達外来です。てんかんや神経発達症、先天性神経筋疾患などのフォロー、不登校・摂食障害などの児童思春期精神科領域までカバーしております。リハビリスタッフ（PT、OT、ST）と常勤心理士 2 名にも恵まれ、嶺南では小児療育の中心的な役割を果たしています。地域の保育園・幼稚園、小中学校との連携も強く、教育・福祉に関わる人とも一緒に子どもたちを支えています。

古くから関西方面との文化の往来を繰り返してきた地でもあり、京都、大阪へのアクセスはよく、嶺北に行くのと同じくらい、それよりも行きやすいポジションであります。嶺北ほど雪は多くありませんし、御食国（みけつくに）と言われる若狭小浜の食は誇れるものがあり、公私ともに楽しめる地域です。是非、お気軽に遊びに来てください。



JCHO 福井勝山総合病院の紹介

森 夕起子

JCHO 福井勝山総合病院を紹介させていただきます。

福井県奥越地方にある勝山市は人口約 2 万 4 千人、九頭竜川の中流域に位置し美しい山々に囲まれた市です。現在では恐竜博物館やスキージャンプ勝山が有名ですが、平泉寺や左義長まつりなど歴史が古い町でもあります。

JCHO 福井勝山総合病院は 2014 年（平成 26 年）に福井社会保険病院から名称変更されました。JCHO＝独立行政法人地域医療機能推進機構とは、厚生労働省所轄の独立法人で、全国の社会保険協会連合などが管轄していた施設等を継承するために設立された団体です。

病床数は一般 158 床、回復期 41 床です。常勤医師は約 26 人で小児科医は一人です。耳鼻科、皮膚科、泌尿器科、整形、脳外など小児も見てくださる先生方に助けられています。

患者さんは勝山市、大野市をはじめ永平寺町からも受診いただいております。外来は一般感染症をはじめ、低身長やアレルギー疾患、腎疾患、少数の神経疾患など、細々と担当しております。ワクチンや健診もおこなっております。診療時間にもゆとりがあり、一人ひとり、保護者や兄弟姉妹の様子も観察することができます。かかりつけ医としても、何らかの疾患の担当医としても対応できる環境だと思います。

入院はわずかではありますが、熱性疾患を中心に、補助換気が不要な気道感染、胃腸炎、尿路感染など受け入れております。困った症例や迷う症例は、大学病院をはじめ、各先生方に相談させていただき診療をおこなっております。



中部縦貫道が松岡から大野市まで整備され、松岡から勝山市間は車 30 分程で行き来する事ができます。私は福井市から通勤しておりますが渋滞もなく、山々の緑と川の流れに癒されております。

今後ともよろしくお願いいたします。



医療法人穂仁会 大滝病院小児科

小倉一将 福井大学（旧福井医科大学）医学 2001 年卒業



朋有会会員の先生方には、いつも御指導をいただき誠にありがとうございます。2013 年 4 月より医療法人穂仁会大滝病院小児科で勤務している小倉です。おかげさまで子供たちの笑顔に囲まれて、楽しく診療に従事させていただいております。

当院は福井市の西部に位置する計 110 床の一般病床と療養型病床とを合わせ持つケアミックスの病院で、小児科（常勤医師 1 名）を含む 14 の診療科を設置しています。当院の医局には、高木兼寛医師が唱えた「病気を診ずして病人を診よ」という言葉が書かれた額が掲げられており、初代大瀧秀穂理事長が医師の心得として推奨し、子どもからお年寄りまで心身ともに健やかに暮らせるよう、単に疾患を診るだけでなく、患者さんの全身状態や家族背景、生活環境にも配慮することを大切にして、地域医療に取り組んでいます。当院はこの理念をもとに 1962 年 6 月の開院以来、民間病院として小児科を設置している、福井県内では数少ない病院のひとつです。

当院小児科を受診される患者さんは、通常疾患の診療や予防接種、乳児健診のために来院される方が多いですが、発達障害や心身症、不登校など社会的な問題を抱える患者さん、精神的なサポートが必要な育児不安を抱える保護者の方など、様々な問題をもつ方も少なくありません。地域の小児科医として、子育て支援や小児保健活動などを担っています。

当院は、2006 年 3 月より、福井市、近隣市町からの委託、支援を受けて、病児・病後児保育園を併設しており、当科は、病児・病後児保育園を利用させていただく窓口になっています。医療機関併設型の利点を生かして、単にお子さんをお預かりするだけでなく、回診を行い、保育中の病状を踏まえて、帰宅前にホームケアも含めた指導を行っています。

また、一般小児科診療だけでなく、ニーズの高い小児のアレルギー疾患の診療についても、福井大学小児科学教室大嶋教授にご指導いただきながら、行っています。大嶋教授をはじめとして、福井大学小児科学教室の先生方の御支援のもと、医師派遣を含めた連携をさせていただいているおかげで、じっくりと時間をかけて関わりたい症例や、社会的な問題を抱えた患者さんと向き合う時間をとることができ、とてもありがたいことだと感謝しております。

す。

当院小児科は、患者さん、ご家族が心配されていることは、小さなことでも気軽に相談できる小児科でありたいと思っております。そして、重症な疾患や問題については、病状を見極め、機を逸することなく、適切な対応ができる医療機関へご紹介させていただくよう心がけております。これは高度な専門医療を提供されている医療機関で診療されている先生方のご協力があることと、この場をおかりして、深く感謝を申し上げます。地域のニーズに応じた小児医療を充実させていくことで、福井県の小児医療のさらなる発展に、微力ながら、貢献できたら幸いに思います。

2019年度福井大学医学部小児科学教室同門会 ＜朋有会＞ 総会 議事録

日時：2019年7月7日 11:30～12:00

場所：ユアーズホテルフクイ 2階 桜の間

出席者：43名（委任状32）

1. 会計報告 ・ ・ ・ 資料1

2018年度収支決算報告、および2019年度予算案が承認された。

2. 会員入会状況

- ・ 会員数 94名（医師85名、留学生1名、事務・技術補佐等8名）
- ・ 新入会：川浪春菜先生、新田祥代先生、福岡 諒先生
- ・ 退会者：小畑浩一郎先生

3. 役員改選について ・ ・ ・ 資料2

会則に基づいて、新役員が決定した（任期：2019年5月1日～2022年4月30日）

4. 若手医師助成金について

2019年度も、引き続き2017年度改定案の基準で助成を行うこととなった。

＜2017年度 改定案＞

- ・ 対象者：専門研修医3年間 地方ブロックレベル以上での発表者のみ
- ・ 助成額：学会参加費＋交通費＋宿泊費（大学の出張費に準じ、上限40,000円）
- ・ 申請方法：学会参加証、学会プログラムのコピーを、小児科事務 岸本さんへ提出
- ・ 初期研修医への助成：全国レベルの小児科関連学会（日本小児科学会、およびその分科会）が主催する学術集会またはセミナーに参加する場合、参加費、交通費、宿泊費の一部を援助する。（※ただし、年間合計10万円程度を限度とする。）

＜2018年度 助成実績＞

- ・ 学会参加費 1名（10,000円）

2018年度に大学で小児科の1年目の専門研修を受けた医師に対しては福井県からの補助金が支給されたため、そちらを利用して学会に参加してもらったため、同門会からの支出は1件にのみであった。

5. 会報誌について

- ・ PDF化したものを同門会ホームページに掲載し、原則として冊子体は作らない。希望される会員にのみプリントアウトしたものを送付する。
- ・ 今回は関連病院の科長に、紹介の原稿を出してもらった。
- ・ 重松会長に巻頭言をお願いした。

- 他の会員からも、広く原稿を募集している。
6. Web カンファレンスについて
- 今年度から、大学のクリニカルカンファレンスを Web カンファレンスとして学外からも参加可能にしている。小浜病院、県立病院から参加実績あり。
 - Web カンファレンス用アカウントの年間使用料（5～6 万円）、Web 用マイクなどの必要物品の購入費を同門会から拠出することが承認された
 - 実施に際しては、今まで以上に個人情報の保護に留意するようにとのご意見があった。
7. 名誉会員について
- 現在の名誉会員：須藤先生、眞弓先生
 - 名誉会員は年会費を無料とすることになった。
8. 2018 年度活動報告・2019 年度活動計画・・・資料 3



朋有会 集合写真



眞弓学長退任を祝い



新人自己紹介



谷澤先生院長就任を祝い

資料1 会計報告

2018年度 収支決算報告書(2018年5月1日～2019年4月30日)

収入の部		支出の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	1,205,271	若手医師助成金	10,000
年会費	457,000	学会参加費(出口)	10,000
2018年度会費5,000円 1名	5,000		
2018年度会費5,000円 1名	5,000		
2018年度会費1,000円 8名	8,000	通信運搬費	11,446
2018年度会費5,000円 45名	225,000	会費納付依頼, 総会案内	11,446
2017年度会費1,000円 4名	4,000		
2017年度会費5,000円 17名	85,000	事務運営費	4,560
2016年度会費5,000円 3名	15,000	懇親会花束不足分	4,560
2015年度会費5,000円 1名	5,000		
学内まとめて	105,000		
雑収入	12		
普通預金利息	12		
収 入 計	1,662,283	支 出 計	26,006
		次年度へ繰越	1,636,277

2018年度 会計監査結果

予算執行状況について関係書類により出納状況を精査したところ、経理及び事務処理は適正であったことを報告いたします。

1年6月10日
監事 藤澤 晨一 

1年6月16日
監事 藤 正一 

2019年度 予算(案)					
収入の部				支出の部	
科 目			金 額	科 目	金 額
前年度繰越金			1,636,277	若手医師助成金	200,000
年会費			414,000	通信運搬費	20,000
2019年度会費5,000円	80 名		400,000	会費納付依頼, 総会案内	
2019年度会費1,000円	14 名		14,000	会計監査郵送費	
雑収入			20	事務運営費	50,000
普通預金利息			20	予備費	1,780,297
収 入 計			2,050,297	支 出 計	2,050,297

資料2 新役員名簿 (任期：2019年5月1日～2022年4月30日)

会 長：齋藤正一
 副 会 長：土田晋也 (つちだ小児科)
 理 事：大嶋勇成 (福井大学医学部小児科)
 安藤 徹 (市立敦賀病院)
 木村宏輝 (きむら小児科)
 西田公一 (福井循環器病院)
 会計担当理事：五十嵐愛子 (福井大学医学部小児科)
 庶務担当理事：安富素子 (福井大学医学部小児科)
 監 事：谷澤昭彦 (公立小浜病院)
 畑 郁江 (福井県立病院)

資料3 2018年度活動報告・2019年度活動計画

2018年度 報告

2018年7月1日(日) 朋有会 2018年度総会・懇親会
 2018年4月 会費納付依頼、昨年度総会報告、会則および総会・懇親会の事前通知送付

2019年度 計画

朋有会 2019年度総会・懇親会
 日時：2019年7月7日(日) 11:30～
 場所：ユアーズホテルフクイ 2階 桜の間
 2019年 4月 会費納付依頼、昨年度総会報告、会則および総会・懇親会の事前通知送

福井大学医学部小児科学教室同門会会則

第1条 本会は、福井大学医学部病態制御医学講座小児科学教室同門会 朋有会と称する。

第2条 本会は、小児科学に関する研究及び知識の交換を図り、小児医療ならびに福井大学医学部病態制御医学講座小児科学教室の発展に寄与し後援するとともに、会員の親睦を図ることを目的とする。

第3条 本会は、かつて福井大学医学部病態制御医学講座小児科学（旧福井医科大学小児科学）教室に在籍し研究・診療・職務に従事した者および現在も従事している者を以て構成する。

第4条 役員

1) 本会に次の役員を置く。

① 会長 1名

② 副会長 1名

③ 理事 若干名

④ 会計 1名

⑤ 監事 2名

⑥ 名誉会員

2) 会長、副会長、監事、会計は理事会の推薦により総会において決定する。

3) 理事は会員の中から総会において選任し、理事の互選により理事長を選任する。

4) 会長は本会を代表し、会務を総理する。

5) 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれに代わる。

6) 理事は重要な会務を審議し分掌する。理事会は会の重要な会務を審議し、その他諸般に関する事務を司る。

7) 監事は会計を監査し理事会に出席し意見を述べることができる。監事は本会の年度会計並びに財務一般を監査する。

8) 名誉会員は会長の推薦により理事会において決定する。

9) 役員の任期は3年とする。ただし再任は妨げない。補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。

第5条 総会は会員をもって構成し、定期総会は年1回開催する。会の運営に関する役員会は随時会長の召集により開催する。

第6条 会費は一口3,000円とし、総会、懇親会費は別途に徴収する。

2. 名誉会員は会費は無料とする。

第7条 会計年度は5月1日より4月30日迄とする。

第8条 本会は、事務局を福井大学医学部病態制御医学講座小児科学教室に置く。

第9条 本会会則の変更及び最速の作成は理事会の審議を経て総会の承認を得る。

附則

本会則は2013年5月1日より施行する。

2019年7月7日改訂

編集後記

1983 年（昭和 55 年）4 月に旧福井医科大学設立とともに小児科学教室が開講されましたが、同門会がないままでした。教室同門会の発足を希望される声もあったことから、教室員の交流の場として 2012 年に同門の集いを開催し、集いに参加いただいた先生方から同門会を設立の賛同いただきました。初代教授須藤正克先生に同門会の名称を『朋有会』と命名いただき、2013 年に第 1 回の同門会を開催しました。その後、年 1 回、同門会を開催してきましたが、会に参加された先生以外の近況を知ることが出来ないことから、2 年前に同門会誌を発行しようということになりました。開講当初から同門会誌を発刊している教室では同門会誌を冊子体として作成していますが、同門会として財政基盤や作成諸費用などを勘案し、電子版で作成することとなりました。昨年は、同門会誌用の原稿を募集しましたが、どのような内容にするか具体的な提案がないままの募集であったこと、原稿募集の案内が周知できなかったことから、原稿が集まらず発刊は見送りとなりました。今年は、同門会誌のイメージを会員の先生方に持っていただくため、関連病院の紹介を中心に原稿を集めさせていただきました。今回の創刊号をきっかけに、会員の先生方からいろいろな記事を寄せていただき同門会誌の内容を充実できればと願っております。

令和元年 7 月吉日

大嶋勇成

同門会事務局：

福井大学医学系部門医学領域小児科学内

〒910-1193 福井県吉田郡永平寺町松岡下合月 23-3

TEL：0776-61-3111（2316）

FAX：0776-61-8129

電子メール：kyumi@u-fukui.ac.jp

同門会誌への寄稿をお待ちしています。